

特別支援学校(知的障害)と医療機関及び家庭との連携について —関係者会議を通して—

村井 敬太郎*

I. はじめに

澤村・奥野(2009)はリハビリテーション分野における連携とは、障害のある人が自立して社会参加していくために、障害当事者の視点に立って複数の専門職、複数の機関が協働・協力し、最も適した効率的なサービスを提供するための学際的かつ実践的な活動・方法であると定義し、リハビリテーション専門職間の有機的な連携の充実を提言している。

リハビリテーション分野の1つである学校教育では、特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議(2003)の最終報告において、障害のある児童生徒のニーズは教育、医療、福祉などの様々な観点から生じるものであり、教育面からの対応を考えるについても、医療、福祉などの面からの対応の重要性も踏まえ、関係機関との連携協力に十分配慮することが必要であることを示している。

ところで、最近の特別支援学校では、在籍する児童生徒の障害の重度化、重複化、多様化が進むにつれて、医療や福祉などの関係機関との連携の重要性への認識が高まってきており、関係機関との連携に関する実践が少しずつ報告されてきている(庄司, 2005; 阿久澤2006 他)。しかし、香川(2005)は、特別支援学校は児童生徒一人一人の課題に着目した教育的支援を中心に据えているが、在籍する児童生徒の障害の重度化、重複化、多様化に応じた支援を行うために必要な医療や福祉などの関係機関との連携を十分に行ってこなかったとして、組織的な連携を推進することを提唱している。香川(2005)の指摘から推察すれば、今後の特別支援学校は個別の教育支援計画の作成やリハビリテーション専門職との関係者会議などを通して、在籍する児童生徒が関係機関で受けている支援目標や支援内容の共通確認をしたり、児童生徒への今後の支援の方向性を協働で模索したりといった連携のあり方を考える必要がある。

そこで本稿では、特別支援学校(知的障害)における医療機関との連携の実際について報告し、関係機関との今後の連携の方法について検討することとした。本報告で検討を行う連携の実際とは、特別支援学校(知的障害)小学部に在籍する児童に対し、児童が通う医療機関の担当言語聴覚士(以下、ST)及び児童の保護者(両親)と学級担任が一堂に会して児童

* 山梨大学教育人間科学部附属特別支援学校

の学習課題および学習内容の共通確認を行った会議(以下、関係者会議)である。

II. 実践経過

1. 対象児童

関係者会議の対象となったのはA君である。A君は関係者会議当時、ある特別支援学校(知的障害：以下、B特別支援学校とする)小学部5年生である。医療機関で「知的障害を併せ持つ自閉的傾向」と診断されている。医療機関の言語療法にはB特別支援学校小学部入学前から通っており、現在は月2回程度利用しているとのことである。

2. 関係者会議開催までの手続き

関係者会議を開催するきっかけは、A君の保護者(母親)の「A君の最優先課題を明らかにすると共に、『医療機関-家庭-学校』での学習課題と学習内容を確認する機会を設けたい」という学級担任への要望であった。

A君の在籍するB特別支援学校の医療や福祉機関などとの連携は、児童生徒についての書類や電話による情報交換、年1回程度の相互の見学などによるものが主であった。A君についても関係者会議を行う前の連携は、個別の教育支援計画による「医療機関-学校」相互の支援目標と支援内容の確認、A君の体調や学習への取り組みの様子を記入した連絡ノートとの交換、学級担任による医療機関での言語訓練見学及び担当STによる学校見学であった。

関係者会議の開催にあたっては、A君の保護者(母親)からの要望にあったように「A君の最優先課題を明らかにすると共に、『医療機関-家庭-学校』における学習課題と学習内容を確認する」ことが最優先であると考えた。そこで、これらを行うことができるような関係者会議を目指し、連携のあり方に関して幅広く紹介している近藤(2002)の研究より、医学的リハビリテーションのチーム・マネジメントで用いられている多職種連携による患者ケアの4つのモデルから、「統合モデル」を参考に関係者会議の内容を計画した。「統合モデル」とは、一人のチームリーダーの判断や決定だけが治療やケアに最優先されるのではなく、多職種スタッフや患者本人の意見も反映させて必要なリハビリテーションの目標やメニューを決定し、チームスタッフの専門性や力量を踏まえた適切な仕事分担などをして患者ケアに取り組むものである。また、関係者会議において「医療機関-家庭-学校」から出された意見を偏りなく集約できるように、近藤(2002)が示している「チーム・マネジメントの質を決める4要素：1. ゴール 2. 多面的評価と共通認識 3. 適切なモデルの選択 4. リーダーシップ」も参考にした。そして、関係者会議の目的と内容を参加者全員にE-mailと電話にて連絡し、承諾を得た後に開催することとした。

3. 関係者会議の手順

関係者会議は平成 χ 年6月、B特別支援学校相談支援室で行った。設定時間は14:45～

16:30の1時間45分であった。参加者はA君の保護者(両親)，担当ST，学級担任3人の計6人であった。参考資料としてA君の個別の教育支援計画と個別の指導計画をコピーして参加者全員に配布した。

関係者会議の手順は次の通りであった。関係者会議の目的を「A君の最優先課題を明らかにすると共に、『医療機関-家庭-学校』での学習課題と学習内容を確認する」ことが議題であることを参加者全員で再確認した。次に関係者会議の手順は、「①A君の最優先課題を挙げる」「②現在、『医療機関-家庭-学校』で行っている主な学習内容を明らかにする」「③『何のために、どのようなことに取り組んでいるのか』を明らかにする」「④A君の最優先課題と現在行っている学習内容を照らし合わせて、今後行うべき学習内容を明らかにする」ことであることを確認した。

関係者会議の冒頭に話し合いの目的と内容を確認した後、上記の手順に従って話し合いを進めた(図1)。進行役は学級担任である筆者が行った。①から④の話し合いの仕方については、参加者より①から④の項目に沿って自由に発言してもらい、その要旨を記録者が付箋紙に記入して図2に示した用紙に貼り、それを参加者全員で総括して今後のA君に対する学習課題と学習内容を共通確認するという手続きをとった。また、関係者会議の結果の概要は、進行役である筆者が文書にまとめ、後日、医療機関及び家庭、学校に報告した。



図1 関係者会議の様子

4. 関係者会議の結果

関係者会議の結果を、①から④の話し合いの項目毎に図3から図5に示した。

(1) A君の最優先課題について

「①A君の最優先課題を挙げる」では、「医療機関-家庭-学校」が共通して主にコミュニケーションに関する事項をA君の課題として挙げていた。A君は他者からの簡単な言語的

指示や写真カードなどの視覚的指示に従って活動することができており、これらの力がさらに高まっていくことができればと考えられた。しかし、他者への発信手段について課題があり、発語も含めて本人が発信しやすい手段を使って他者と関わっていくことが重要であるとまとめられ、これを最優先課題とすることを合意した(図3)。

<Aくんの最優先課題は？ どんなことが学習できると、生活しやすくなるのか？>

<医療機関> <家 庭> <学 校>

<Aくんが現在、主に学習していることは？>
～誰んのために、どのようなことに取り組んでいるのか？～

<医療機関> <家 庭> <学 校>

<医療機関>

<Aくんの今後の学習内容>

<家 庭>

<学 校>

<今後に向けて>

図2 関係者会議で使用した意見記入用紙

(2) A君の学習課題とその取り組みについて

次に、「②現在、『医療機関-家庭-学校』で行っている主な学習内容を明らかにする」と「③『何のために、どのようなことに取り組んでいるのか』を明らかにする」では、「医療機関-家庭-学校」それぞれがA君に対して行っている支援を一覧表に整理した(図4)。

医療機関では、主に他者とのコミュニケーションを高めるために、A君が楽しいと思う活動の中で他者に要求を発信する手段と他者とコミュニケーションを取りたい気持ちを育

てる取り組みがされていた。家庭では、主に発語を促すために口唇や舌、手指のマッサージなどを行っていた。学校では、主に実用的な発信手段を身につけることができるように、絵カードやサインなどで自分の意思や要求を他者に発信する学習に取り組んでいた。

(3) 今後のA君の学習内容について

最後に「④A君の最優先課題と現在行っている学習内容を照らし合わせて、今後行うべき学習内容を明らかにする」について共通確認を行った(図5)。

「医療機関-家庭-学校」で確認した結果、今後行うべき学習内容は「社会的に実用性の高いコミュニケーション手段(本人が使いやすいもの、周囲の人がわかりやすいもの)の獲得を目指して、特に発信手段と他者に発信する気持ちを高める」ことを中心に、「医療機関-家庭-学校」が連携して取り組むこととなった。具体的な学習内容は、医療機関では現在の学習内容を継続することとなり、家庭では現在の学習内容を継続するが、家庭生活の中でA君が意思や要求を出しやすい場面を意図的に設定することとした。一方、学校では発信手段の実践的な活用を重要視し、学校生活の中で本人から意思や要求を発信する場면을意図的に設定することとなった。なお、どのような補助機器や手段を活用するかなどの具体的な発信手段は、「医療機関-家庭-学校」が再度検討してから各学習場面に導入することとした。

<A君の最優先課題は？ どのようなことが学習できると、生活しやすくなるのか？>



< 医療機関 >	< 家 庭 >	< 学 校 >
<p>☆コミュニケーションについて、受信はできているが、発信では何か本人が使いやすいものを使ってできると良いと考える。もっと自分の要求や意思を出してほしいと考える。</p> <p>☆コミュニケーションについて、発信をするための手段 (skill) と気持ち (mind) を高めてほしいと考える。</p>	<p>☆その場のシチュエーションで本人の言いたいことが周囲の人に分かってしまいがちであるが、コミュニケーションの特に発信について、発話もさめくもう少し高まってくると良いと考える。</p> <p>☆コミュニケーションについて、受信はできているので、このまま高まってくれば良いと考える。</p>	<p>☆我慢していることが多く見られるので、困っている時や何かを伝えたいなどに、自分から他者に伝えられると良いと考える。</p> <p>☆給食場面において、自分の要求を発信や何らかの手段で出してくれることがあるので、それを他の場面でも出せるようになること良いと考える。</p> <p>☆話し言葉やカードなどを使って、自分の要求や意思を他者に伝えられると良いと考える (AACの活用など)。</p> <p>☆授業を考えると、授業時間中は立ち回したりしないで、できれば集中して学習に取り組めると良いと考える。</p>

図3 A君の課題

<Aくんが現在、主に学習していることは...?>

～何のために、どのようなことに取り組んでいるのか?～



< 医療機関 >	< 家 庭 >	< 学 校 >
<p>☆コミュニケーション能力を高めるために</p> <ul style="list-style-type: none"> 本人の「楽しい」と思う活動を中心に組み立てている。その中で他者に自分の要求や意思を発信することができたり (e.kil)、楽しい活動を他者と共有することができたりすることで、他者とコミュニケーションすることの楽しさ (mind) を伝えている。 トランプや風船テニス、ゆとり遊びなどを通して、他者を意識して遊ぶことに取り組んでいる。 ジェスチャーや文字、カード、機器 (トークアシスト) などを用いて、発信手段の獲得を目指している。 <p>など</p> <p>☆ADL関連動作を高めるために</p> <ul style="list-style-type: none"> 洗濯物を干したり取り込んだりすることで、手指の巧緻性の向上に取り組んでいる。 <p>など</p>	<p>☆コミュニケーションを高めるために</p> <ul style="list-style-type: none"> 発語と発語を促していくための口唇、手指、舌の動きを高めるためのマッサージに取り組んでいる。なお、3歳くらいまでは二語文字前まで発語することができていた。ジェスチャーもできていた。 本人の体調がすぐれない時に、カードで様子を確認している。 <p>など</p>	<p>☆実用的なコミュニケーション手段を獲得することができるよう</p> <ul style="list-style-type: none"> 行き先を写真カードなどで他者に知らせる 自分の要求等を他者に単語やサインなどで発信する <p>など</p> <p>☆身辺処理能力を向上するために</p> <ul style="list-style-type: none"> 家庭の場において、トイレ、食事などの社会的技能の向上、獲得 <p>など</p> <p>☆身体の動き方を高めるために</p> <ul style="list-style-type: none"> マラソン サーキット運動 <p>など</p> <p>☆集団での活動に取り組めるようになるために</p> <ul style="list-style-type: none"> 小集団で友達と同じ活動をする 小集団の中で活動する 集団のルールに沿って活動する <p>など</p>

図4 A君の現在までの主な学習内容

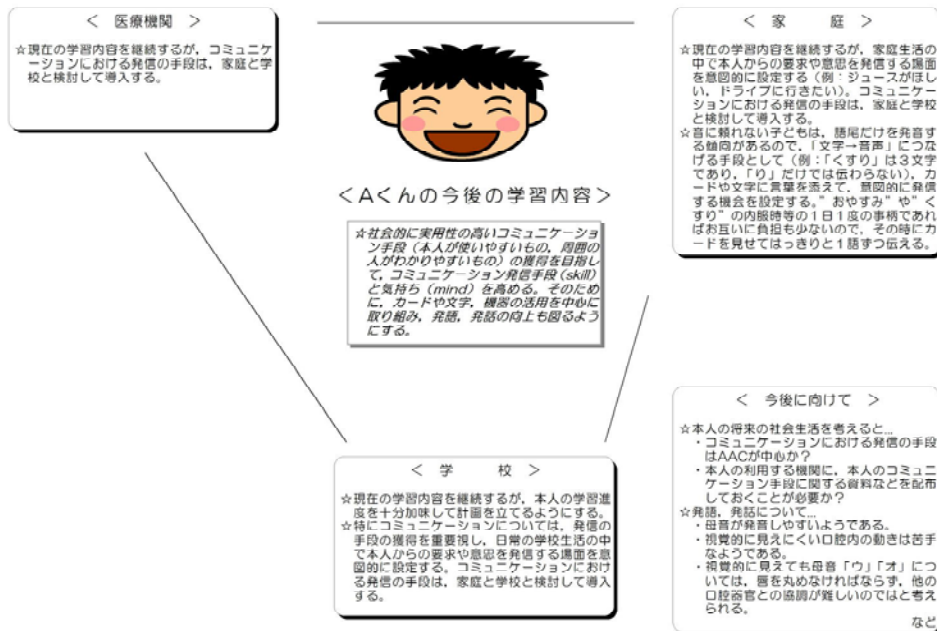


図5 A君の今後の学習内容

Ⅲ. 考察

1. 関係者会議開催までの手続きについて

今回の関係者会議では、連携のあり方に関して幅広く紹介している近藤(2002)の研究を参考に、事前に関係者会議の骨子を作成して話し合いの進め方の共通確認を図り、「医療機関-家庭-学校」が共通したテーマに基づいて進めることができるようにした。学校教育における関係者会議の持ち方は様々な形が想定されるが、児童生徒の単なる状況報告や連携機関への役割分担の依頼だけではなく、それぞれの専門性や立場を加味し、何をどのように分担していくかなどといったことを明確に結論づけることができるように設定する必要があると考える。したがって、今回のように、「医療機関-家庭-学校」が直接意見交換をしながらA君をどのように支援していくのかを共通確認できるような関係者会議を設定できたことは、今後のさらなる連携を進めていく上で有効であったといえよう。

2. 関係者会議の手順について

今回は関係者会議の冒頭に話し合いの目的と手順、協議する事項を参加者全員で再確認してから進めた。さらに、話し合いの記録では、「医療機関-家庭-学校」のそれぞれの立場から出された意見をすぐに記録できるように付箋紙を活用し、それを図2に示した用紙に意見を記入した付箋紙を貼って、それぞれの意見を視覚的に振り返りやすく、かつ、集約しやすいように配慮した。今回のように関係者会議を円滑に行い、一定の方向性を結論づけられるような話し合いの手順は、異なる専門性を持つ関係機関が共有すべき情報を明らかにすることができると思う。さらに、連携を図る上で関係機関の役割が明瞭になって、質の高い支援に取り組むことにつながるようになるといえよう。

3. 関係者会議の結果について

今回の関係者会議によって、A君の最優先課題や現在「医療機関-家庭-学校」で行っている主な学習内容、今後行うべき学習内容などの詳細を明らかにして「医療機関-家庭-学校」で共通確認を行うことができた。しかし、今回の関係者会議ではA君の具体的な学習課題と学習内容の共通確認を行うことができたが、実際に使用する補助機器や手段などといった今後の具体的な方法を見いだすまでには至らなかった。今後も定期・不定期を問わずに継続して関係者会議を行うとともに、個別の教育支援計画や医療機関との連絡ノートも十分に活用することでさらに連携を深め、「医療機関-家庭-学校」の三者でA君の学習課題の達成に向けて実践していきたいと考える。

Ⅳ. おわりに

従来、学校教育は様々な関係機関や組織などとの連携に馴染みが薄かったのではないか

と思われる。しかし、児童生徒の障害の重度化、重複化、多様化及び社会の情報化や複雑化、個人の価値観の多様化などが進む現在、学校教育と関係機関との連携は不可欠であるといえる。これからの学校教育は、やむを得ずに関係機関の協力を仰ぐという消極的な姿勢ではなく、関係機関のノウハウを導入することによって、従来以上の教育的効果を上げようという積極的な姿勢への転換が必要になるであろう。

文献

- 1) 阿久澤栄(2006)養護学校における進路指導(就労支援)と連携. リハビリテーション連携科学, 7(2), 88-90.
- 2) 香川邦生(2005)障害児教育における連携の課題. リハビリテーション連携科学, 6(1), 28-40.
- 3) 近藤克則(2002)リハビリテーションチーム・マネジメント. 総合リハビリテーション, 11, 1125-1129.
- 4) 澤村誠志・奥野英子(2009)リハビリテーション連携論—ユニバーサル社会実現への理論と実践—. 三和書店.
- 5) 庄司和史(2005)聾学校乳幼児教育相談における医療・保健機関等との連携. リハビリテーション連携科学, 6(1), 60-62.
- 6) 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議(2003)今後の特別支援教育の在り方について(最終報告). 文部科学省.